

Persuasion : Anne と階級社会

Persuasion : Anne and the Class Society

内藤 歆修

Kanshu NAITO

要 旨

ジェイン・オースティン最晩年の作品で、最期の完成作である *Persuasion* は他の 5 作品と趣を異にしている。それまでの作品は結婚に到るまでの女主人公の精神的成長を追っている。しかし、本作品の女主人公 Anne は 8 年前に「説得」されて解消した婚約を復活すべく努力し、困難を克服し成功する。

8 年の間、元の恋人を忘れることが出来ず失意の生活を続けていたが、父親の放漫財政のため邸宅を人に貸さなければならなくなり、Anne は 1 人、妹の嫁ぎ先へ手伝いに行く。貴族階級から郷紳階級へと環境が変わり、自宅では「ただのアン」でしかなかったが、人の「役に立つ」という気持ちで生きることにし、有用な Anne に変化して行った。この階級の人々と交わり、また新興階級である海軍軍人たちとの交際もするようになる。3 つの階級で生活をしたり、見聞きすることによって、Anne は自分の役割や居場所を見付け、澁漉として若やぎ、かつての美しさを取り戻し、ついには前の恋人との結婚に到る。当時の英国の階級社会の姿と Anne の関わり合い、階級社会が彼女の失われた恋の復活に与えた影響を考察した。

ジェイン・オースティンの最晩年の作 *Persuasion* は、既に余命幾ばくもない⁽¹⁾、1815 年 8 月から翌年の 1816 年 8 月まで、39 歳から 40 歳にかけて執筆した作者最後の完成作品⁽²⁾ ⁽³⁾である。

主人公 Anne Elliot⁽⁴⁾ ⁽⁵⁾は准男爵 Sir Walter Elliot の次女で、物語が始まる時点で 27 歳の独身である。父親 Sir Walter はイングランド南部サマーセットシャー(Somersetshire)のケリンチ・ホール(Kellynch Hall)の当主である。自分の容貌と地位、名誉など外見にこだわる俗物であり、尊大で、虚栄心が強く、責任感に欠ける、54 歳になる独身の男性である。

家中到る所に鏡を取り付けているナルシストで、自分の美しい姿を眺め悦に入っている。読む本は主に『准男爵録』で、地位に対する虚栄心を満足させている。13 年前 41 歳のときに上手に家政の切り盛りをして来た妻 Elizabeth を亡くして以来、見栄と贅沢により、とめどもなく浪費を重ね、物語

が始まる時点ではその浪費癖のためにケリンチ・ホールを他人に貸して、バースの町に暮さざるを得ない状況に追い込まれている。この時代、社会状況は徐々に変化し、かつて一定の地域を代々支配して来た地方の貴族が、力を付けて来た新興の勢力に取って代られることがよくあった。この物語に出て来る軍人などは、ナポレオン戦争で財を成した、新たな新興著しい階級であった。

Anne の姉の Elizabeth は父親譲りの美しい容貌の持ち主だが、同時に父親と同様虚栄心が強い 29 歳の独身である。10 年以上前の 17、8 歳の頃、Sir Walter Elliot の甥でケリンチ・ホールの跡取りに指定されている Mr. William Walter Elliot との婚姻を周囲は期待していたが、Elizabeth が持参金が少ないのを知っている Mr. Elliot は身分の低い金持ちの女性と結婚してしまった。

Anne の妹 Mary は近郊の村アップークロス(Uppercross)の地主である Musgrove 家に嫁いでおり子供が 2 人いる。彼女は家庭的には恵まれているが、気立てと分別の点で Anne より大分劣る。

主人公 Anne は 8 年前、ナポレオンがトラファルガー海戦で敗北を喫した翌年の 1806 年、19 歳のとき、当時 23 歳で軍艦の副長であった Frederick Wentworth と恋に落ち、求婚される。Anne は Wentworth の“a great deal of intelligence, spirit and brilliance” (I, vi)⁽⁶⁾を信じて、一旦は求婚を受け入れるが、周囲の反対にあつて婚約を破棄してしまう⁽⁷⁾。身分を過度に重んじる父親には、Wentworth は自分たちよりずっと格下だと言われ、反対された。昔母の友人で今は Anne の真価をただ 1 人理解し、“most correct in her conduct, strict in her notion of decorum” (I, ii)と評され、信頼の置ける Lady Russell にも、Wentworth は地位も財産もコネもなく、職業がら命の危険にさらされることが多い、身分不安定な人物であり、19 歳の身空でこのような人物と結婚するのは「身を捨てる」(a throwing away) (I, iv)ようなものと言って反対されてしまった。Anne の名付け親 Lady Russell は Elliot 家の 3 人姉妹の中でひとり性格も人柄も母親似の Anne に目を掛けて来てくれた人で、Anne はその反対に抵抗出来なかった。そこで Anne は婚約解消は自分本位の用心深さからではなく、Wentworth を婚約で縛るのは彼の利益にならないと考えてのことという信念に慰めを見出したのであった。しかし、破棄した苦しみは数ヶ月で終わらず、愛情と後悔は、その後も長く尾を引き、彼女は歳を経るに従って、年齢以上に若さの輝きと活力を失ってしまった。Wentworth と別れたあと、交際範囲の狭い地方社会の暮しでは、惹かれる相手にはついぞ出会うことが出来なかったのである。22 歳のとき、この地方ではケリンチ・ホールの Elliot 家に継ぐ大地主である、アップークロスの Musgrove 家の長男の Charles Musgrove に求婚される。彼は Lady Russell の希望する条件に適合していたが、相手を見極めて、自分から断った。Anne は知性的で、理性的な考え方をする女性である。Charles は知性的からは程遠く、Anne の生活態度とは相容れない人物であるし、Anne は Wentworth への思いを断ち切ることが出来なかった。便宜上の結婚などという妥協を許さないのである。

Anne は父と姉 Elizabeth と 3 人で暮らしていたが、家庭の中では影が薄かった。周りの人々から正当に評価されずに、常に否定され譲歩することを求められていた⁽⁸⁾。

...Anne, with an elegance of mind and sweetness of character, which must have placed her high with any people of real understanding, was nobody with either father or sister: her word had no weight; her convenience was always to give way; – she was only Anne. (I, i)

Anne は「ただのアン」と不当な扱いをされ、それを甘受している家庭の中では、心は満たされない。未婚ではあっても Sir Walter 邸の家政責任者で父の愛情を一身に受けて、充実した生活を送っている Elizabeth とは異なり、Anne は同じ未婚でも依って立つ所のない、自らの役割と存在意義を見出せない不安定な生活を余儀されている。家庭の中で疎外感⁽⁹⁾を感じざるを得ない状況にある。その彼女に変化が訪れた。Sir Walter の浪費がたたり、財政逼迫でとうとうケリンチ・ホールを貸して、バースに移ることになったのである。その借家人は Admiral Croft 夫妻に決まった。たまたま、Admiral Croft の夫人は Frederick Wentworth の姉であった。Anne は8年の歳月をへだてて、近いうちに、Wentworth と再会する巡り合わせになった。彼と別れてからも、彼を思い切れない Anne はそのことを知ったとき、心が大きく動揺し、平静な気持ちに戻るのに、多くの努力を必要とした。

... many a stroll and many a sigh were necessary to dispel the agitation of the idea. She often told herself it was folly, before she could harden her nerves sufficiently to feel the continual discussion of the Crofts and their business no evil. (I, iv)

いよいよ Elliot 家の引っ越しが間近に迫ると、アッパークロスの Mary から Anne に手紙が来て、Anne など誰も望んでいないバースに行かないで、人手の欲しい自分の所に来て欲しい、と頼んで来る。Mary は身体の具合が悪いと言って Anne を呼び寄せたのである。Elizabeth に“nobody will want her (Anne) in Bath.” (I, v) と言い放たれた Anne もバースに魅力を覚えず田舎に留まりたく思っていたので、自分が必要とされる場所に行くことは幸せなことと考えて、Mary の言葉をもっともだと思い、計画を変更する。常に “nobody” として扱われている Anne にとって必要とされることで存在意義を感じる事が出来るからである。

To be claimed as a good, though in an improper style, is at least better than being rejected as no good at all; and Anne, glad to be thought of some use, glad to have any thing marked out as a duty, and certainly not sorry to have the scene of it in the country, and her own dear country, readily agreed to stay. (I, v)

アッパークロスの Musgrove 家は Walter 家に次ぐ大地主で教養はないが愛情豊かな善良な一家であ

る。昔からの伝統・慣習を受け継いだ親の世代と、新しい考え方や趣味を持つ息子や娘たちの世代が同居している。Anne を待っていた Mary は姉が到着すると直ぐに、気紛れで、簡単に気分を変える性格を露わにした言葉で迎える。

“So, you are come at last! I began to think I should never see you. I am so ill I can hardly speak. I have not seen a creature the whole morning!”

“I am sorry to find you unwell,” replied Anne. “You sent me such a good account of yourself on Thursday!”

“Yes, I made the best of it; I always do; but I was very far from well at the time; and I do not think I ever was so ill in my life as I have been all this morning – very unfit to be left alone, I am sure.” (ibid.)

Mary は、その言葉に人柄がよく出ている。自分を統御する術を心得ていない自己中心的で感情的な女性である。彼女が言うように、Anne は Elliot 家では不当に低く評価され扱われている。Anne の意見や判断は常に無視され、その都合は顧みられない。しかし彼女は忍従し、上手に対処している。

Anne は Musgrove 家という他人の中で見失いかけていた存在意義を徐々に見出し、疎外感を解消して行く。この過程でキーワードとなるのが “useful” である。Mary と Charles 夫妻と彼らの2人の子供は新宅アップパークロス・コテージに、Musgrove 老夫妻と Charles の妹 Henrietta と Louisa は本宅グレイト・ハウスに住んでいる。Anne はこの新旧の両方の家で、苦情や愚痴を聞かされる。彼女は話の聞き役として皆から必要とされ、その判断を求められる。

Mary についての愚痴を、夫 Charles からは自己憐憫を止めさせるように、姑 Mrs. Musgrove からは子供の教育の一貫性のなさについて、Anne は聞かされる。一方、Mary は Mrs. Musgrove の女中達に対する躰が良くないことを Anne に訴える。Anne は妹、その夫、その姑から調停役を頼まれるが、それぞれの苦情は簡単には解決がつかない、結局のところ、どうしようもないものである。現実の人間関係は一筋縄ではいかず、他人に出来ることは当事者の話をよく聞き、気持ちをほぐし、本人たちの自律的な解決を促すしかないであろう。相談をしている Charles や Mrs. Musgrove もこのことは分かっているようで、Anne に事態を解決してくれとは言っていない。2人の言い分に、彼らが Anne に持つイメージが伺え、Anne の人柄がよく反映されている。

郷紳の家に嫁ぎ社会的に恵まれた地位に安住して、感情の赴くままに生活をしている Mary と対極にしているのが、現在の Anne である。ケリンチ・ホールでも “nobody” であった Anne は、アップパークロスでも自分自身が “nothingness” (I, vi) と感じていた。Anne は絶えず自分の存在の小ささや限界を実感させられている。Wentworth との婚約を破棄した後、彼への絶つことの出来ない思いを深く胸に秘め、静かに暮らしている。Wentworth との関係でも、身内・親戚との関係でも、安楽とは程

遠い境遇に身を置く Anne の意識は絶えず自己訓練、我執の超克を自らに課しているよう見える。自分が必要とされているという有用性に存在意義を見出そうと行動している。

本作品では3つの階級が登場する。Sir Walter に代表される貴族及び上流階級、Admiral Croft に代表される海軍軍人、Musgrove 家に代表される農業経営の成功者としての郷紳階級という大きく分けて3つの階級⁽¹⁰⁾である。

ここで、最も痛烈な批判が加えられているのが Sir Walter である。彼は大きく変化している世の中に背を向け、地主としての責任を果たすこともせず、先祖から継承してきた遺産を浪費するだけで、刻々変化する現状に対処する能力に欠けている。新しい時代への対応力に欠ける者として表舞台から退場する運命にある。彼の脳裏は、家柄、外見、贅沢などに満たされていて、理性、合理性、知性、有用性などという言葉は存在しない。それ故、父の生き方とベクトルが反対である Anne にはケリンチ・ホールに居所がないのは当然である。Sir Walter と Elizabeth がこの先老化という変化が必ずやって来ることに目をつむり、何年も変わらずに、容姿の美しさを誇っているのは、大きな荘園を持つ伝統的地主である貴族階級という地位が産業革命後激しい社会的地殻変動により現在危うくなっているが、その危機に気付かず、優位な地位をただ誇って無自覚に享受しているだけであることを比喩的に表しているようである。

一方、海軍軍人たちは貴族階級と対極にいる社会に属している。自らの才覚だけを頼りに時代の変化に即応し、成功への可能性に賭けようとするグループである。彼らの夢を実現可能にしているのは、戦争という時代の波である。彼らは常に死と背中合わせである。どのような苛酷な情況にも適応し、困難に打ち勝って行かなければならない。理性や合理性の基盤に立って行動しないと生命が脅かされる危険性がある。しかし、ここで成功した人々は大きな財産を得ることが出来る。社会的に重きを置ける新しい階級の出現である。Anne は自分の性格から言ってもこの階級の人々と親和性があり、しかも愛する Wentworth は成功した軍人である。この階級に組み入れられるのが、Anne の熱烈な願望となっている。Anne の場所の移動の終着地は将にこの新興の階級社会である。

伝統と新興の階級の間には活躍するのが、Anne が留まって自己の真価を発見した中産階級のジェントリー社会である。地方地主の Musgrove 家は3世代に亘る大家族が混然と寄り集まって暮らしている。昔ながらのどっしりとした屋敷の近所には、息子夫婦の近代的な別邸が建てられており、伝統的な英国様式とベランダやフランス窓などを取り入れた若い世代の新しい英国様式が混ざり合い、時代の変化に合わせて自在に変容している。伝統的な英国のやり方に巧みに新しさを取り込んで、時代の波に乗っているのである。このグループの人々は必ずしも知性や品格は高くないにしても、Sir Walter の社会と比べると、血の通った、暖かみのある人間関係を築いている。Anne はこの社会に暮らすようになって、初めて「有用性」 “usefulness” という自分の役割を自覚し、自信を持って行動が出来、周りの人々に存在を認められるようになった。時代は伝統的で保守的な社会から、革新的で合理的な社会に徐々に変化しつつあった。伝統保守的な枠組みを越えた Anne の特性が時代と合致す

るようになって来たとも言えよう。すると、Anne の真価をこの社会で十分に発揮させることの出来る事件が起きた。

アップークロスに Wentworth が来訪する前日に、Mary の長男 Charles が鎖骨と背中に大けがをしてしまう。Anne は周囲であたふたする人々を尻目に冷静で適切な判断を次々に下し指示を与える。医者や父親など必要な人を呼び、周りの人々に気を配り、適切な処置をし、混乱を収めた。Anne は皆から指示を待たれ、彼女の存在感が示される。彼女の的確な対応と看病で発揮した有用性は、後に起こるライムでの Louisa の事故への対応の下準備とも言えるものである。ここでは最早 “nobody” ではなく、皆から必要とされる存在となっている。

Wentworth がケリンチ・ホールに到着したという噂が Anne の耳に入って暫くして、恐れていた再会の時を迎える。Anne と別れたあと彼は大いに活躍し、大きな財産を蓄え、今では2万5千ポンドもの財産を所有している。しかし、今の Anne にはそれは何の関係もない。Wentworth が Musgrove の人々と Anne の前に姿を現し、2人が8年ぶりに顔を合わせたときも、Anne の波立つ心とは反対に、互いに目を合わせ、簡単な素っ気ない挨拶を交わすだけであった。そして、数分後には彼は皆と共に立ち去ってしまった。とにかく、2人は顔を合わせ、無事対面を済ませたのである。最悪の時は去った。ホッとしたにはホッとしたが、8年間彼を思い切ろうと努力を続け、それなりに心の整理がついていたと思っていたのに、彼女の人生の3分の1に当たる月日は、その努力に殆ど効果を与えていないようだ。

What might not eight years do? Events of every description, changes, alienations, removals, – all, all must be comprised in it; and oblivion of the past – how natural, how certain too! It included nearly a third of her own life.

Alas! with all her reasonings she found, that to retentive feelings eight years may be little more than nothing. (I, vii)

一方、Wentworth の方はと言うと、Henrietta と Louisa の Musgrove 姉妹が帰って来た後、Mary はこのようなことを言う。

“Henrietta asked him what he thought of you, when they went away; and he said, “You were so altered he should not have known you again.” (ibid.)

現実残酷である。これを聞いて Anne は黙って深い恥辱感に身を任せ、Altered beyond his knowledge!” (ibid.)という言葉を受け入れた。自分の容色はすっかり衰えたが、Wentworth はいっそう闊達に、男らしくなった。この彼の言葉は、彼を思い切ろうとしている自分の心の動揺を鎮め落ち

着かせる性質のものだから、心が明るくなってよいはずだと思う。自分だけが Wentworth を意識していたことに気付き、彼は自分を意識していないと言い聞かせ、心を落ち着かせようとする。

ここで Wentworth の気持が説明される。決断力と自信に満ちた彼は、Anne が強く説得され、弱い性格のため、臆病な行動を取って自分を捨てたのを今でも許すことが出来ない。彼は当時、Anne を熱烈に愛していた。別離後 Anne に匹敵する女性に出会うことはなかったが、許せない気持ちは捨てられず、再び逢いたいと思っただけはなかった。蟠りがとけず、2人はこの時から繰り返し同席することになるが、言葉を交わすことはしない。Wentworth の理想の女性は “A strong mind, with sweetness of manner”(I, vii)である。他人の言いなりになって自分との婚約を解消した Anne の “a feebleness of character” (ibid.) を許せないのであろう。

Musgrove 家での集まりがあった、ある晩のことである。

The evening ended with dancing. On its being proposed, Anne offered her services, as usual, and though her eyes would sometimes fill with tears as she sat at the instrument, she was extremely glad to be employed, and desired nothing in return but to be unobserved.

It was a merry, joyous party, and no one seemed in higher spirits than Captain Wentworth. *Once* she felt that he was looking at herself – observing her altered features, perhaps, trying to trace in them the ruins of the face which had once charmed him. (I, viii)

やがて踊りが終り、Anne はピアノを離れ、何気なく Wentworth が Musgrove 姉妹と話しているところへ行く。彼は立ち上がって、わざとらしい礼儀正しさで言う。

“I beg your pardon, madam, this is your seat;” and though she immediately drew back with a decided negative, he was not to be induced to sit down again.

Anne did not wish for more of such looks and speeches. His cold politeness, his ceremonious grace, were worse than any thing. (ibid.)

Wentworth の Anne への気持ちは8年経っても屈折したままである。Anne は Wentworth のここまで冷たくよそよそしい態度を大変心外に思う。

11月のある晴れた日、Musgrove の女性たちは遠足に出掛ける。そこに男性も加わった。Anne は Wentworth を観察する機会を持つことが出来た。彼は Louisa に Anne を意識しているとしか思えない忠告をする。偶然近くの木陰にいた Anne はこの言葉を漏れ聞いてしまう。

“It is the worst evil of too yielding and indecisive a character, that no influence over it can be

depended on. – You are never sure of a good impression being durable. Every body may sway it; let those who would be happy be firm.” (I, x)

続けて、手近にあった枝から榛の実をもぎ取って、秋の嵐にも負けずに生き残り、美しい姿を保っていることを引き合いに出し、彼は意志薄弱な女性を批判し、理想の女性像を熱意をもって Louisa に語る。

“My first wish for all, whom I am interested in, is that they should be firm. If Louisa Musgrove would be beautiful and happy in her November of life, she will cherish all her present powers of mind.” (ibid.)

彼の真剣な情熱が込められたこの興味深い言葉に、未だ若く、その若さをただ享受することだけに夢中な Louisa は何の返答も用意出来なかったが、Anne は自分に対する彼の批判と理解し、彼が未だ彼女を許していないのを知る。しかし、今は何も釈明出来ず、ただ沈黙を守るしかなかった。

Wentworth の姉は Admiral Croft の妻 Mrs. Sophia Croft で元気のいいはきはきした明るい女性で、男性と対等に行動する。ケリンチ・ホールを借りる際も、夫人は夫と共に賃貸交渉にも参加し、夫よりも商売に明るいことを示す。Anne に “Mrs. Croft looking as intelligent and keen as any of the officers around her.” (I, vi) と観察されている。頭の回転も男性に引けを取らず、提督に代わり馬車を操るほどの行動家で、男性と対等に渡り合える女性である。Wentworth は姉 Mrs. Croft 宅をよく訪ねており、男性と同等に渡り合える姉の生き方を認めているのは明白である。そのような彼が力説する上記の言葉は本心からのものと言えよう。

Wentworth はこの遠足の少し前、Anne を小さなトラブルから、何気ない様子で救ってくれるという好意を示していた。Anne がアップークロスの応接間で怪我をした Little Charles を介護している所へ Wentworth が入って来る。彼は Musgrove 姉妹がいると思ってきたので、少しどぎまぎする。そこへ、Charles Musgrove の従兄で Henrietta の恋人の Charles Hayter が来て、そのすぐ後に Mary の次男 Walter が入って来る。Walter は病気の兄と遊べないので、Anne に執拗にからまりつく。Little Charles に注意を向けていた Anne がいくら命令し懇願しても、背中に取り付いて離れない。Hayter が厳しくたしなめても少しも動こうとしない。次の瞬間、Anne は子供から解放される。Wentworth が突然抱き取って連れ去ってくれたのであった。

Her sensations on the discovery made her perfectly speechless. She could not even thank him. She could only hang over little Charles, with most disordered feelings. His kindness in stepping forward to her relief – the manner – the silence in which it had passed – the little particulars of

the circumstance – with the conviction soon forced on her by the noise he was studiously making with the child, that he meant to avoid hearing her thanks, and rather sought to testify that her conversation was the last of his wants, produced such a confusion of varying, but very painful agitation, as she could not recover from, till enabled by the entrance of Mary and the Miss Musgroves to make over her little patient to their cares, and leave the room. (I, ix)

Wentworth の胸の底には半ば無意識の Anne に対する愛が未だ残っている。彼女の婚約破棄の意思表示後、思い切った筈の、彼女への愛は彼の心の底に沈殿して決して動かず、静かに存在している。彼自身にもはっきりと自覚されていないが、Anne の存在が彼に強く訴え掛ける場面で、無意識のうちに顕在化する。それは日常的な振舞や会話に意識的に顕れるようなものではないし、表現出来るものでもない。諦念と忍従の内に暮っていた Anne の心はその正体を感じ取り大きく動揺する。Wentworth がよそよそしい取り澄ました態度を取り続けるための切ない苦しみに混じる密かな心のときめき。かつて、恋心をたぎらせた者同士にのみ感知出来る、側にも他の者には決して感じる事の出来ない、密やかな心の交流である。このシーンは時を超越する新鮮さと気品がある。

Anne のアッパークロス滞在が2ヶ月になり、引越すことを考えている頃、Wentworth の友人の Harville 大佐が海岸の保養地であるライムに家族と一緒に過ごすことになったという知らせが彼のところに来る。そこで、Wentworth、Anne、Charles と Mary の Musgrove 夫妻、Musgrove 姉妹はそろってライムに小旅行をすることになる。常に物語の背景に留まっていた Anne が、ここライムで大きな転換期を迎える。今まで下降線を辿っていた彼女の立場が反転して上昇へと向かうのである。

Harville 夫妻は Benwick 大佐と一緒に暮らしている。Benwick はかつて Harville の妹と婚約を取り交わしたが、恋人は急死し、航海中にその知らせを受け取る。もの静かなうちに強い感情を秘める彼は悲しみに沈んでいる。失恋の経験を持つ Anne は悲しみを共感したい思いで Benwick と話しをする。彼が主に失恋の悲しみを歌う詩句を好み、悲しみに感溺するために詩を読んでいることを見抜いた Anne は、詩は悲しみを克服するために読むもので、感傷に溺れることなく分別をもって鑑賞すべきだと助言し、詩歌だけでなく最良のモラリストたちの作品などを読むことを勧める。

このように Anne は人と積極的に交わり、人の役に立つと自覚するに従って、自信を持つようになり、その自信が彼女の印象や外見に生き生きとした美しさを与えるようになって来た。Anne は仲間と翌朝海岸を散歩していると、側を通りかかった見知らぬ紳士が Anne の顔を熱の籠った称賛の目付で眺める。

…Anne’s face caught his [a gentleman’s] eye, and he looked at her with a degree of earnest admiration, which she could not be insensible of. She was looking remarkably well; her very regular, very pretty features, having the bloom and freshness of youth restored by the fine wind

which had been blowing on her complexion, and by the animation of eye which it had also produced. It was evident that the gentleman ... admired her exceedingly. (I, xii)

その場に居合わせた Wentworth を Anne は一瞥するが、彼もこれに気付く “That man is struck with you, – and even I, at this moment, see something like Anne Elliot again.”(ibid.)と言わんばかりであることを見て取る。

Anne は宿屋に戻ると再びその紳士に出会う。紳士はまたもや Anne をうっとりとする。暫くすると給仕からその紳士は Anne の従兄の Mr. William Walter Elliot であることを知らされる。この気持のよい風采の、良識がありそうな紳士は Sir Walter の法律上の跡継ぎで、将来ケリンチ・ホールの主となる人であった。このような紳士に熱い視線を向けられて、Anne は密かに満足感を抱いた。

一同はその日ライムの名所コブ（突堤）へ最後の散策に出かける。皆は風が強くてコブの陰しい階段を用心しながら歩くだけで満足しているが、Louisa は Wentworth の助けをかりて飛び降りると言っけかかない。最初は成功したが、2度目の試みのとき、Wentworth の介添えが間に合わず、コブの舗道に落ちる。抱き上げると、目は閉じ呼吸もしておらず、顔は死んだ人のように見えた。一同はパニック状態に陥る。蒼白な顔をした Wentworth は Louisa を腕に抱えたままひざまずいて “Is there no one to help me?”と絶望的に言う。Anne は “Go to him, go to him, for heaven’s sake go to him. I can support her myself. Leave me, and go to him. Rub her hands, rub her temples; here are salts, – take them, take them.” (I, xii)と指示する。全員が狼狽し取り乱したなか、強い克己心を持つ Anne らしくとっさの処置や冷静で適切な指示を次々に出す。

Anne, attending with all the strength and zeal, and thought, which instinct supplied, to Henrietta, still tried, at intervals, to suggest comfort to the others, tried to quiet Mary, to animate Charles, to assuage the feelings of Captain Wentworth. Both seemed to look to her for directions.

“Anne, Anne,” cried Charles, “what is to be done next?” What, in heaven’s name, is to be done next?”

Captain Wentworth’s eyes were also turned towards her. (ibid.)

Anne はこの出来事で優れた人柄の価値と能力を周りの者たちにしっかりと認識させた。この一件をきっかけに頼りにされる存在へと変化して、自分だけの判断で行動出来る女性、精神的に自立した女性として認められた。Wentworth は Anne の素晴らしさを再認識し彼女に対する態度に変化が起こる。Anne は彼の態度に “a gentleness, which seemed almost restoring the past” (I, xii) が籠もっていると感じる。彼と初めて会った 19 歳の Anne と不注意から大怪我をした 19 歳の Louisa、その

違いは歴然としている。周囲の人々からの信頼感は Anne に再び自信を持たせた。Anne の外見はそれと並行するように変化して行った。Wentworth に “Altered beyond his knowledge!” (I, vii) と言われたが、今は以前の美しさを取り戻した。また、Anne の優しさに接した Benwick は、“Elegance, sweetness, beauty” (II, ii) と Anne を称える。人は注目されることで、元気になり、魅力を増す。特に女性はその美しさを最大限に発揮する。Anne は Wentworth の好意を感じ益々自信を持ち、心に華やぎを感じた表情は更に美しくなった。そして、精神的に自立し、美しさも回復した Anne は自信を深めて行き、Wentworth の今の心境を忖度する余裕も生まれた。

Anne wondered whether it ever occurred to him now, to question the justness of his own previous opinion as to the universal felicity and advantage of firmness of character, She thought it could scarcely escape him to feel, that a persuadable temper might sometimes be as much in favour of happiness, as a very resolute character. (I, xii)

Anne は 8 年前の決断は間違っていなかったのではないかと、「断固たる性格」の Louisa も「他人の意見に従う性格」の自分も共に幸せになれるのではないかと考え始めたようである。

この場面は、メインテーマ「説得」のバリエーションにもなっている。Louisa は周囲の説得を受け入れずに我を張って重大事故を引き起こした。Anne が周囲の説得に従って婚約を破棄したことは Wentworth の胸にときがたい蟠りを残した。一方、この時の Louisa の振舞とその結果は説得を無視するもので、説得に従わないということは誤った振舞になり得るという考えを彼に促させたはずである。

Louisa の容態が徐々に快復し、皆が安堵感を覚えた頃、姉の Elizabeth から便りがあって、Mr. Elliot がバースに来ており、キャムデン・プレイスを 3 度訪れたこと、以前と異なり、礼儀正しく振舞い交際を求めていると知らせて来る。Anne は嬉しく思って、高級住宅地キャムデン・プレイスを訪ねることにする。訪れると、父と姉は家と家具を見せるのが嬉しくて歓迎してくれる。当の Mr. Elliot がある日、晩の 10 時に突然に訪れる。ライムで偶然見かけて強い印象を受けた Anne に再会し驚くと同時に、自分の従妹と知って喜ぶ。Mr. Elliot の物腰、作法、表情どれも洗練されて如才がなく、話題の選択や話のタイミングの判断など、分別と洞察力を備えた知性を持つことを物語っている。彼はそれ以降キャムデン・プレイスを頻繁に訪れる。

Anne はこの頃ふとしたことから昔の学校友達 Mrs. Smith がバースの町に静養を兼ねて暮らしているのを知る。今は夫を亡くし、リウマチに苦しみながら窮乏生活に堪えながらも、柔軟な知性と素直な性格と楽天的な気質を失うことなく明るく生きていた。この Mrs. Smith はプロット上では、Mr. Elliot に関する情報をもたらす役割を持ち、やがて彼の本性が明らかにされる。

Lady Russell は Mr. Elliot を高くかい Anne を手に入れるに値する人とみなしている。Anne も彼

と結婚すればケリンチ・ホールの女主人になれるという思いに一瞬胸を躍らしたりする。作者は人の気持ちの機微を冷静に描写している。しかし、こんな夢を抱いても、理性の女性 Anne の本質は変わらない。懇懇で用心深い Mr. Elliot の過去が信用出来ない。善悪に対し感情を露わにすることもなく、本心を人に見せない態度に警戒心を覚え、結婚する気にはなれないのである。

Mr. Elliot was rational, discreet, polished, – but he was not open. There was never any burst of feeling, any warmth of indignation or delight, at the evil or good of others. This, to Anne, was a decided imperfection. (II, v)

Mr. Elliot was too generally agreeable. Various as were the tempers in her father's house, he pleased them all. He endured too well, – stood too well with everybody. (ibid.)

2月になると、Mary からの手紙が届いた。Anne は Louisa と Benwick の婚約を知り、ことの意外性や組み合わせの奇異さに驚くと同時に、Wentworth と Louisa の結婚の見込みがなくなったのを喜ぶ。すると程なく、Wentworth がバースにやって来る。Anne が窓辺に座っていると、彼は通りを歩いて来る。不意に Anne の姿を目にすると赤面し、動揺、狼狽の様子である。数日後、音楽会があって、2人は会話を交わす。話が Benwick と Louisa の婚約に及ぶと、彼は言う。

“I regard Louisa Musgrove as a very amiable, sweet-tempered girl, and not deficient in understanding; but Benwick is something more. ………. A man like him, in his situation! With heart pierced, wounded, almost broken! Fanny Harville was a very superior creature; and his attachment to her was indeed attachment. A man does not recover from such a devotion of the heart to such a woman! – He ought not – he does not.” (II, viii)

Anne は部屋の騒音やざわめきにも拘らず、心を打たれ感謝し混乱し呼吸が早まり、一時に沢山のことを感じ始める。Wentworth は Benwick のことを話しつつ、Anne との昔の恋を、そして今の愛を重ねていて、彼女はそれを感じ取っている。彼にとって理想の女性とは、自分の意見を述べず、常に忍耐し、従順な女性ではないし、Louisa のように自己中心的にしたいことをする向う見ずな女性でもない。教養があり、周囲の状況を理解したうえで自分の意見を述べ、判断出来る女性、男性にも劣らぬ行動力を身に着けた女性である。やがて音楽会が始まり、Anne は Mr. Elliot と並んで座り、Wentworth は離れて座っている。終わりに近付くと彼はそそくさと Anne にさようならを言い、Anne の愛想のいい対応にもかかわらず会場を立ち去ってしまう。Anne は直感的に彼は Mr. Elliot に嫉妬

していると知り、一瞬満足感を覚えるが、どうやって彼に真実を告げたものかと困惑する。

翌朝彼女は Mrs. Smith を訪ねる。道中自分の愛は永久に Wentworth のものだと思う。今のどっちつかずの状態がよいほうに転ぼうと悪いほうに転ぼうと、永久に彼のものであることを確認する。

Their union, she believed, could not divide her more from other men, than their final separation.

Prettier musings of high-wrought love and eternal constancy, could never have passed along the streets of Bath, than Anne was sporting with from Camden-place to Westgate-buildings. It was almost enough to spread purification and perfume all the way. (II, ix)

オースティンは Anne の純粋な愛は至高の価値を持つと謳いあげている。

オースティンが作中人物の気持ちにこんなにもめり込むのは六篇の完成作品中他にはどこにもない。Anne の気持ちには Wentworth との恋の成就の予感の歓びだけでなく、何に恥じる所もなく、良心に照らして公明正大な生き方をして来たという気持ちをはっきり出ている。Mrs. Smith は Anne を歓待し、その様子を見れば最愛の人と楽しい夕べを過ごして来たのが分かりますと言って彼女を赤面させ、Mr. Elliot に私のことを話して欲しいとあって驚かせる。Anne はこの時初めて Mrs. Smith と Mr. Elliot が知己の間柄であるのを知る。夫人は Anne に Mr. Elliot のことを誉め、結婚すれば幸せになれるでしょうなどと言う。Anne は彼女の誤解を正して、若い頃の Mr. Elliot について尋ねる。すると、彼女は前言を打ち消して、Anne の思いもかけないことを言う。

“Mr. Elliot is a man without heart or conscience; a designing wary, cold-blooded being, who thinks only of himself; who, for his own interest or ease, would be guilty of any cruelty, or any treachery, that could be perpetrated without risk of his general character. ... He is totally beyond the reach of any sentiment of justice or compassion. Oh! he is black at heart, hollow and black!” (II, ix)

夫を浪費家にしたのは Mr. Elliot であり、夫の死後も、彼が管財人としての責任を果たさないために、夫の地所から上がる利益を得られないでいることを話す。世間に苦しめられ世間の裏表を見て来た Mrs. Smith は Anne と Mr. Elliot の本当の間柄を知るまでは、旧友に本心を隠して、注意しながら義理と体裁上の会話を取り交わしていたのである。しかし、Anne はこの裏表のある旧友の振舞に苛立ちや憤慨を少しも示さない。親しい仲でも個人的事情で心の疎隔が生じるのは止む得ないことを認めている。

Mrs. Smith は更に、Mr. Elliot について知っていることを話す。彼の最初の結婚は財産目当てで、Elizabeth と結婚してケリンチ・ホールの相続人になるのを嘲笑していた。しかし、今は Anne との

結婚を真に望んでいる。また、Sir Walterのご機嫌取りが上手なMrs. Clayがこのケリンチ・ホールの主と結婚して邸の女主人になるのを狙っているなどとAnneは教えられる。

AnneはMrs. Smithが関係するMr. Elliotの過去の行為についてはLady Russellに自由に話してよい取り決めを夫人と交わして帰宅の途につく。オースティンは人との付き合いの作法に極めて厳密である。人と人との付き合いや心の交流の真髄は知識や技巧、合理性だけではない以上、人との交渉の繊細で優れた描写は人心の機微、人間性に対する深い理解が不可欠となる。オースティンの多様な人間関係の描写の基礎には人間性に対する優れた洞察力がある。

Mr. Elliotに嫉妬し、素気なくなったWentworthの気持を察知したAnneは、悲痛な祈りを込めたともいうような行動に出る。

AnneはMrs. Smithと話し合った1日後、雨の日の午前中Musgrove家の人達と過ごす約束で彼らの宿を訪れた。そこにはMrs. Croftと話しているMrs. Musgrove、同じく語り合っているHarvilleやWentworthがいた。AnneはMrs. Musgroveに勧められるがままにWentworthの前に腰を下ろした。平静を装いながらも心の動揺を抑えきれず、“the happiness of such misery, or the misery of such happiness”(II, xi)という気持ちに浸って行く。Wentworthはやがて、Benwick宛の手紙を書き始める。一方、老婦人達は若い娘が直ぐ結婚するでもなく、長い間婚約状態を続けている弊害をくどくどと話し続ける。2人とも歳をとって声の大きさの調節がきかないので、その声は周りにいるAnneやWentworthの耳にも否応なく入っている。Anneは自分のことを言われているような錯覚をし、心が乱れる。Anneが自分を裏切って、婚約を破棄したことを恨んでいるWentworthは、Anneと彼の過去の婚約など知らない老婦人たちが長い婚約の弊害を話しているのを聞いて、Anneの立場を理解する用意が偶然整うことになった。その時、彼女たちの会話に興味がないHarvilleはAnneを窓際へ身振りと呼び、Benwickのことをきっかけに男女の愛情の特質について議論を始める。愛情に関して男性と女性でどのように質的に、持続的に異なるかを論じていた。Benwickの移り気は必ずしも男の本性を示すものではない。男の本性は強い愛情にあるのだとHarvilleは主張する。Anneはこれに対して、女の愛情は男のそれよりも長く続くものだと強調する。Anneはこの一般論の中に、自分個人の気持ちを織り込み、Wentworthが同室にいるのを強く意識し、勇気を奮い立たせて訴える。

“We certainly do not forget you, so soon as you forget us. It is, perhaps, our fate rather than our merit. We cannot help ourselves. We live at home quiet, confined, and our feelings prey upon us.”
(II, xi)

Anneは一般論に託しながら、こう告白した。自分が決して、Wentworthに対する愛情を諦めたり、忘れていたりしていないことを表明しているのである。女性は家庭を守ることだけが義務で、控えめにし

て自分の心情を言わないのが常識である時代であった。Anne も意見を大胆に主張することは躊躇していたが、自分個人のこととしては決して語れない心情を、ここで男女の愛情の特徴を述べるという一般論に置き換え、意見を間接的に述べる手段を用いて、切ない気持ちを吐露した。女らしさを維持しながらも、臆することなく語っている。この会話の最中に、Wentworth のペンの落ちる音が聞こえる。Anne は思っていたよりも、Wentworth が近くにいたので驚いた。Anne は Wentworth に聞こえているかもしれないという発見にもかかわらず、話を止めない。Wentworth に自分の声が聞こえて欲しいと半ば意識しながら、続ける。

I should deserve utter contempt if I dared to suppose that true attachment and constancy were known only by woman. No, I believe you capable of every thing great and good in your married lives. ... All the privilege I claim for my own sex (it is not a very enviable one, you need not covet it) is that of loving longest, when existence or when hope is gone.” (ibid.)

彼女の声は真剣な心からの叫びである。最早、Harville に向けた言葉ではない。その向う、机の所に座って、聞き耳を立てているであろう Wentworth に一途に心の奥底から訴え掛けているのだった。女性の貞節、彼女自身の「堅固な心」 “constancy” を必死になって訴え、説得しようとしている。話しているうちに、彼女は胸が一杯になり、息が詰まりそうになった。Anne の言葉の中には2人にだけ通じる深い内容が込められている。Wentworth の愛情が過去以上の潮位に達し、外に溢れ出すためには、Anne の助力が必要であった。Anne は十分にこのことを知っていた。彼女の行動は理性に根差したところから発している。Anne の感情はこの理性の助けを借りて、Wentworth の心の中に深く染み通って行き、彼の愛情の潮位を引き上げるのであった。Wentworth は2人から少し離れた席で、手紙を書く振りをしながら、胸をえぐられる思いで、Anne の発言に耳をそばだてて聞き入っていた。この Anne の発言に勇を鼓して、軽率な判断をして来た自分を責める手紙を Anne に手渡し、部屋を出る。

“I can listen no longer in silence. I must speak to you by such means as are within my reach. You pierce my soul. I am half agony, half hope. Tell me not that I am too late, that such precious feelings are gone for ever. I offer myself to you again with a heart even more your own, than when you almost broke it eight years and a half ago. Dare not say that man forgets sooner than woman, that his love has an earlier death. I have loved none but you. ...

You do us justice indeed. You do believe that there is true attachment and constancy among men. Believe it to be most fervent, most undeviating in “F.W” (II, xi)

ここに到って Wentworth の愛の告白が実現した。Anne は彼の愛を再認識し、幸せに包まれる⁽¹¹⁾。

Anne は偶然のこととはいえ、女性の愛情を論じることで自分の真情を相手に得心させることが出来た。この時機を逃しては2度とないというせっぱ詰まった思いでした必死の主張、それは將に彼への説得、間接的な説得であった。Anne は“nobody”として傍観者的な目で距離を置いて周囲を見て来たが、彼女の様々な体験はやがて彼女を冷静で公正な観察者に変え、更には自ら周囲に働きかける積極的な姿勢を身に付けさせた。

Wentworth は裏切られた憤りや怨み、自分が才能と情熱をもって見事に前途を切り開き、名誉ある地位と財産を築いて来たという自信などがその目を狂わせ、相手の気持ちを見誤らせてしまっていた。彼の Louisa への接近、バースへ来てからの嫉妬や失意、Lady Russell に対する敵意は、いずれも彼の自信がもたらす視野の狭さがもとになっていたのである。自分のプライドが Anne への気持ちを抑え付けていた。

“But I was proud, too proud to ask again. I did not understand you. I shut my eyes, and would not understand you, or do you justice. This is a recollection which ought to make me forgive every one sooner than myself.” (ibid.)

すべては終わった。Anne の必死の叫び、熱意を込めた説得は彼に内省と自己認識を促した。彼は彼女の真意がはっきり理解出来た今、自分にとって最大の敵は自分自身であり、自負心であり、自分にとって最も大切なものは謙虚な心であることに気付いた。Wentworth は婚約解消後も Anne が自分を恨んでいなかったことを知り、自身の過ちに気付いた。

Anne は2人きりになると、人の説得に従って Wentworth との結婚を諦めたことについて、自分の考えを述べる。

“I mean, that I was right in submitting to her, and that if I had done otherwise, I should have suffered more in continuing the engagement than I did even in giving it up, because I should have suffered in my conscience. I have now, as far as such a sentiment is allowable in human nature, nothing to reproach myself with; and if I mistake not, a strong sense of duty is no bad part of a woman’s portion.” (ibid.)

説得に応じる基準は、結果が正しかったか、間違っていたかではなく、私情より根本的なモラルという義務感に従うべきであり、内面的には良心の呵責のあるなしということであると主張している。この作品の底に流れる大きな問題は人の「正しい生き方」ということである。それは時として極めて苦しい選択を人に強い、それに従うには己の全力を要するのだとしている。

この結婚について、Sir Walter と Elizabeth は殆ど無関心という反応で賛成した。人生における価値観が全く異なるからである。Mary は Anne が自分のように地主の妻ほどの社会的地位がないことに満足しているので、余裕をもってこの結婚を喜んだ。だが、理性的な Anne にとっては社会的地位はあまり重要ではない。準男爵という大地主の令嬢の立場からある意味不安定な職業軍人の妻になることは、伝統社会では、新しく勢力を貯えて来た、ぎりぎりの紳士階級へと階段を下りていくことになるかもしれない。しかし、Anne の見かけにとらわれず、中身を重視するという価値基準からすれば、Wentworth との結婚は Anne にとってすべての面で最高の結婚だったのである。Anne は3つの階級を移動して、やっと自分に適合する場所を見つけたと言えよう。

注

- (1) James Edward Austen-Leigh: *A Memoir of Jane Austen*; Oxford: Oxford University Press, 1967, p. 159
Early in the year 1816 some family troubles disturbed the usually tranquil course of Jane Austen's life; and it is probable that the inward malady, which was to prove ultimately fatal, was already felt by her.
- (2) *ibid.* p.192
'Persuasion' had been finished in August 1816.との記述がある。
- (3) B. C. Southam: *Jane Austen's Literary Manuscripts*; Oxford: Oxford University Press, 1964, p. 87 に次の記述がある。
The novel was written between 8 August 1815 and 6 August 1816; and the first sheet of the manuscript chapter 10 is dated 8 July 1816.
- (4) Jane Austen: *Jane Austen's Letters to her Sister Cassandra and Others*, ed. R. W. Chapman; London: Oxford University Press, 1964, p. 487 A letter to Fanny Knight. 23 March 1817
オースティンは姪のファニーに Anne について次のような言及をしている。
You may *perhaps* like the Heroine, as she is almost too good for me.
- (5) John Bailey: *Introductions to Jane Austen*; London: Oxford University Press, 1931, p. 94
Bailey の Anne についての好意的な評は多くの人々に支持されているようである。She had no gift for melodrama. But, if the 'accidents' fail, she can do the moving without them, as this book is alone enough to show. There are few heroines in fiction whom we love so much, feel for so much, as we love and feel for Anne Elliot.
- (6) Jane Austen: *The Novel of Jane Austen* vol. V, *Northanger Abbey and Persuasion*, ed. R. W. Chapman, 1923; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1987
Persuasion からの引用は、以後、チャップマンの区分に従って、本文中に記す。(I, i)は第1巻第1章を表す。
- (7) A. Walton Litz: *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development*; New York: Oxford University Press, 1965, p. 154

“*Persuasion* begins where the other novels end.”と述べられている。

- (8) Mary Lascelles: *Jane Austen and Her Art*; London: Oxford University Press, 1954, p. 181

居所がない Anne にとって、Sir Walter と Elizabeth が構成するケリンチ・ホールは“the prison”であると述べられている。

- (9) Litz, *ibid.* p. 154

She is isolated, haunted by a “sense of menace and fear”; she knows only in “apartness.” Her despair is that of modern “personality,” forced to live within itself. と述べている。

- (10) Douglas Bush: *Jane Austen*; London: Macmillan, 1975, p. 183 の分類を応用した。

- (11) Southam, *ibid.* p.95

この章は「全体の the delicate power of the theme, action, and characters に全く調和した」解決方法であった、と評している。

(平成 25 年度特別研究助成による)